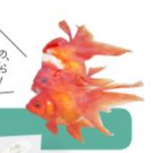
地域に新たな風を吹き込む
ソーシャルビジネスの可能性と実践アイデア

"移住"しなくても
地域を学びたい！
かかわりたい！

島根編です！

たとえば、こんな関係人口。

Type 1 自分の挑戦したいこと・好きなことを地域に近づける。



好きこそものの、島根と関わりながら、上手なれ！

興味のある「教育」を、島根での仕事の選択肢に。

3歳の男の子を育てる主婦の曽根由佳莉さん。以前、専門学校の教務スタッフを務めていたこともあり、教育への関心が高い。「島根県・隠岐島を訪れたときに『魅力化コーディネーター』という職種を知り、出身地の浜田市に配置されることになったら、仕事の選択肢として考えたいと思って」と今、島根大学の「ふるさと魅力化フロンティア養成コース」をウェブで受講中だ。「しまコトアカデミー」のインターンシップで交流した島根の人を、旦那さんと一緒に再訪問するなど何度も島根に通いつつ、「将来を考えながら、家族がその気になったら移住します」と関係人口の濃度を深めている。

主婦・曽根由佳莉さんの関係人口チャート

興味を持ったことには、何でもトライしたい！

曽根由佳莉さん

島根県生まれ、千葉県在住。34歳。「しまコトアカデミー」5期生。島根と関わるきっかけは、軽い気持ちで出かけたしまねUIターンフェア。「そこで『しまコトアカデミー』のメンターに会い、島根に興味が湧いてきました」。

服飾デザイナーから、関心のあった農家へ転身！

東京で17年間、服飾デザイナーとして勤め、多忙な毎日を送ってきた中島梨恵さん。「そろそろ、ほかの仕事や生き方も経験したいな」と思い、退職。食や農、そして島根に関心があったので、島根で農家になることを決意した。移住の準備のため、島根に9回通い、いろいろな地域や人との関係を深め、移住先を自然が豊かな吉賀町に決めた。

「現地に行くと素敵な出会いがたくさんあります。知り合ったおじいさんやおばあさんが気にかけて『元気？』と東京に電話をくださったり。縁もゆかりもない地域ですが、通ってつくった関係があるので不安はありません」と笑顔で話す。

新・吉賀町民・中島梨恵さんの関係人口チャート

は農作業着を。
は、農業を習得！

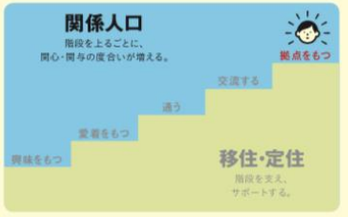
中島梨恵さん

神奈川県生まれ。40歳。元・服飾デザイナー。「しまコトアカデミー」で「おしゃれな農作業着をつくったら？」と勧められ、「経験を生かせるかも」と島根移住への可能性を広げた。2017年12月に移住した。

金魚が大好き！休耕田で養殖に挑戦。

子どもの頃から生き物が好きで、熱帯魚などの卸会社で7年間ほど勤めていたが、「長男なのでそろそろ」と島根に戻る手段を模索した。その一つが「しまコトアカデミー」。メンターから島根での熱帯魚の養殖を薦められ、金魚で実践することに。さらに、出身地である出雲市の地域おこし協力隊の募集を見つけて応募すると採用され、家族と一緒にUターン。今、休耕田を活用した金魚の養殖に地域の人たちの助けを得ながら挑戦中！

金魚生産農家・山田真嗣さんの関係人口チャート



去年は失敗したけど、今年はリベンジするぞ！

山田真嗣さん

島根県生まれ。34歳。東京水産大学（現・東京海洋大学）卒業後、熱帯魚などの卸会社へ。2016年Uターン。「自分がしたいことだけでなく、地域住民として必要なことも。結果、事業にもつながりました」。

好きなことなら、長く継続的に関われそう！

Type 2 東京で地域を発信する。

島根県・海士町産の岩牡蠣「春香」を、東京で味わう！

「ハツモノ！倶楽部」で、東京にいながら島根に還元！

東京の人に地域に関心を持ってほしいと、以前勤めていた『毎日新聞社』の新規事業で関わった青森県弘前市の初物リンゴでつくった「シードルを飲む会」を開いた山尾信一さん。その後、中学・高校を過ごした島根に思いが至り、海士町の岩牡蠣「春香」を取り寄せ、都内の出雲料理店で第1回の「ハツモノ！倶楽部」を開催した。

島根に限らず、長崎県のジャガイモや兵庫県の黒豆なども紹介している。「東京にいながら地域に還元できるものがあると気づき、東京と地域を結ぶという関わり方を見つけました。島根ファンが生まれたら、現地ツアーとか企画したいです」と笑顔で話す。

「ハツモノ！倶楽部」主宰・山尾信一さんの関係人口チャート

「ハツモノ！倶楽部」は地域に関わるきっかけ。

山尾信一さん

大阪府生まれ。41歳。Webメディアディレクター。中学・高校時代を松江市で過ごした。現在は東京でフリーランス。「ハツモノ！倶楽部」は東京と地域を結ぶだけでなく、交流した参加者同士もつないでいる。

クラウドファンディングで、島根の食のイベントを開催！

島根大学を卒業後、東京へ出た杉本頌子さん。「島根との関わり方を模索するなかで、クラウドファンディングに挑戦しました」。そこで、「東京に島根の『おいしい』を届ける」という食のイベントの開催資金を募り、目標金額を達成。島根ゆかりの5つの料理店で特別メニューを依頼し、参加者に振る舞い、津和野町の女性農家を招いた交流会も開いた。イベント後も島根の食材を購入しつづけている料理店もあるそうだ。「ただ、その後はイベントを開けておらず、継続する難しさを感じています」と残念そうだが、「今後も東京にいる関係人口の潜在層を発掘したいです」と意気込む。

「東京に島根の『おいしい』を届ける」主催・杉本頌子さんの関係人口チャート

島根の魅力を東京に、食を通じて届けたい！

杉本頌子さん

兵庫県生まれ。26歳。島根大学在学時に若者交流会や就職交流イベントを主催。卒業後、慶應義塾大学大学院へ。2016年にクラウドファンディングを使って「東京に島根の『おいしい』を届ける」を開催。

ラジオ「ふるさとアンテナ」で、島根での上映会の開催を宣言！

東京・北千住に放送局があるインターネットラジオ「ふるさとアンテナ」のMCを担当し、島根や地域を発信している和田更沙さん。番組のなかで、「映画をきっかけにつながる場を島根につくりたい」と宣言し、まずは2月に都内で上映会を開催。鑑賞後は、参加者が故郷を語り、つながる場を設ける。

憧れて東京に出たが、帰省の度に街が寂しくなる様子を見聞きし、東京で何かできることはないかと島根と関わるようになった。「数年前は、島根と関わろうなんて自分は想像もできませんでした。私が変わったように、上映会の参加者が島根や地域と関わるきっかけになればうれしいです」と話す。

「ふるさとアンテナ」MC・和田更沙さんの関係人口チャート

上映会は2月18日、「5000 dramatic!」で！

和田更沙さん

島根県生まれ。34歳。東京外国語大学卒業。明治大学に勤めつつ、3か月に1度、第3土曜21時からのインターネットラジオ「ふるさとアンテナ」のMCを担当。目標は島根県内で上映会やイベントを聞くこと。

東京での発信力、そして受信力にも大いに期待！

Garden Restaurant
Fathers.
Home
Wine Shop ONLIST
About
Information
Menu
Reserve
Access
KNOCK
KNOCK
DESSINS DE LICHTENSTEIN

醗酵文化研究所
CONTACT US
NEWS
ABOUT
ご縁と美肌のプラットフォーム
レンタルスペース
ワークショップ
カフェ
自由で面白い交流を生み出すレンタルスペース＆カフェ
Shimane Stories!
醗酵文化研究所

bulk
store
kinotoma

bulk store kinotoma

友だち 309

ナッツやドライフルーツなどの量り売りのお店です >

トーク

所在国・地域： 日本

「過疎」という言葉の生まれた街・島根県益田市に映画館を復活させ、広い世界への入り口を作りたい！

島根県　映画

2008年に廃業した島根県益田市の映画館を復活させ、誰もが知っているヒット作から、アート性の高いマイナー作品、世界中の空気に触れられるドキュメンタリーまで様々な作品を、気軽に見に行ける環境を再び作ります！

コレクター
476 人

現在までに集まった金額
6,537,000 円

残り日数
0 日

FUNDED

このプロジェクトは、目標金額6,000,000円を達成し、2021年10月29日23:59に終了しました。

シェア　ツイート　サイトに埋め込み

PRESENTER
和田 浩章　プロフィールを表示

Shimane
Cinema
Onozawa

プクプクドウ

ぷくぷく堂

開店前から行列ができる山間のパン屋さん

PATAGONIA

養光の瀧
全国No.2535号
江津店
TEL.52-0086

ALL SOPHIANS FESTIVAL 2024
募金箱

未来をつくるSDGsマガジン　自分の人生を豊かにする移住の仕方！「ニュー・移住」の大特集！

ソトコト

5
May 2024
SOTOKOTO

1760YEN

大好評！
ソトコトOnline
sotokoto-online.jp

アクセスは
こちらから

2024年4月15日発行　THE RAKE JAPAN EDITION 5月号増刊　ソトコト

ニュー・移住の
Q&A

ニュー・移住スタイル

New Lifestyle Relocation

未来をつくるSDGsマガジン　まちづくり、仲間づくりのアイデアがたくさん！「ローカルプロジェクト」の大特集！

ソトコト

大好評！
ソトコトOnline
sotokoto-online.jp

アクセスは
こちらから

No.271
2
February 2024
SOTOKOTO
1760YEN

ソトコト第26巻第1号（通巻271号）2024年1月15日発行（年11冊発行）

まちをワクワクさせるローカルプロジェクト2

吉田田タカシさんの
ローカル
プロジェクト論

Exciting
Local
Projects

指出 一正
2月7日 19:59 ·

【やわらかいインフラ】
まちに関係人口が現れ、移住者が増えていく傾向として、「やわらかいインフラ」の存在がある。

やわらかいインフラ7
・おいしいコーヒー
・バチバチのWi-Fi環境
・同世代の仲間
・おしゃれな本屋
・盛り上がるブルワリー
・使い勝手のいいコワーキングスペース
・最高のパン

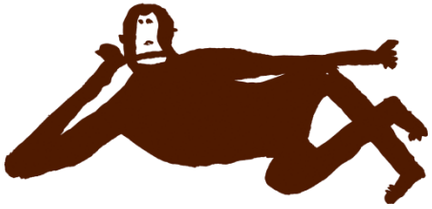
もし、みなさんの暮らす地域にこれらの「やわらかいインフラ」があれば、若い世代の人たちが集まり、きっとあれこれと、楽しいことを始めているだろう。

あなた、福野 博昭、佐藤 泰那、他665人　コメント57件　シェア26件

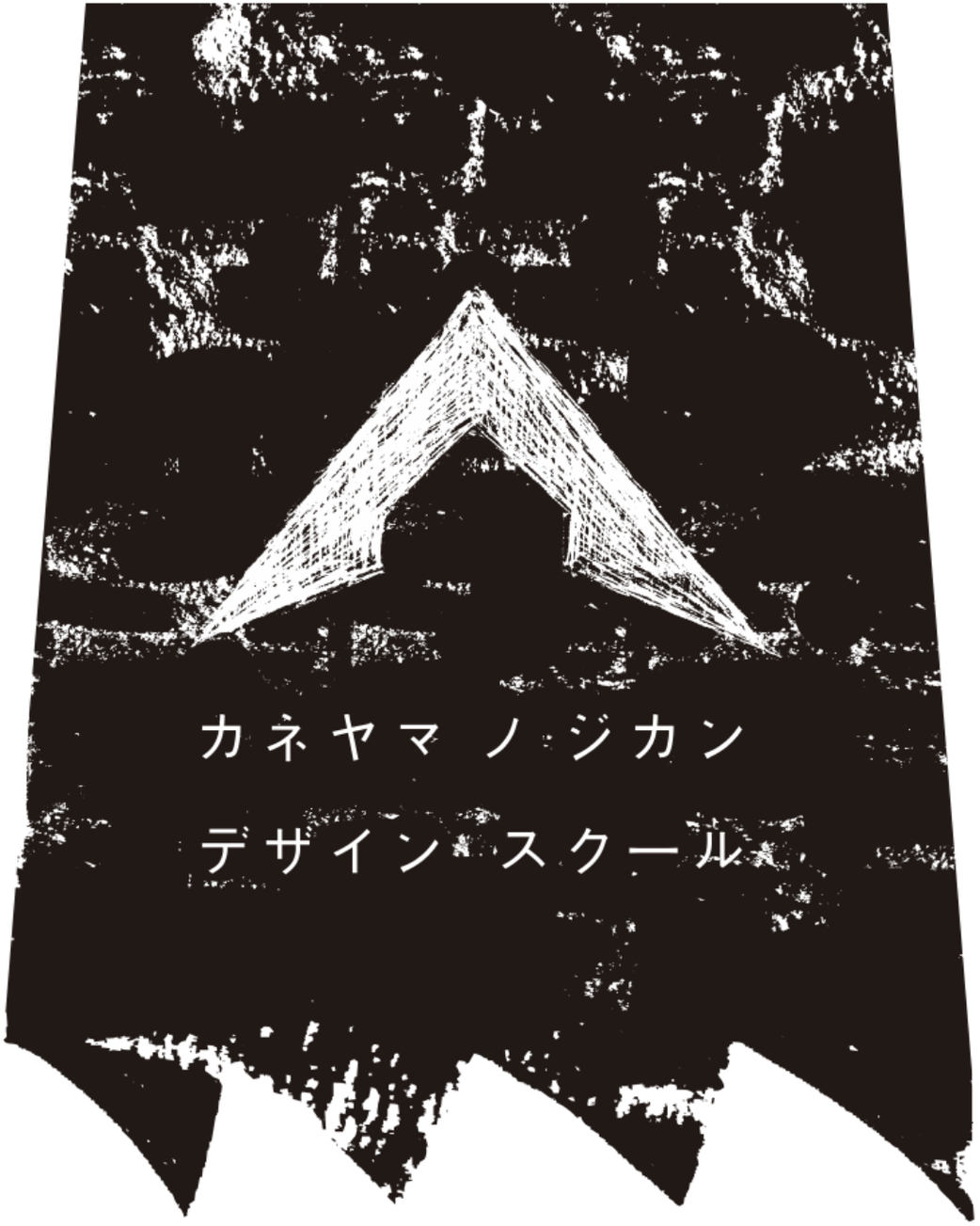
超いいね！　コメントする　シェア

3年目の『カネヤマノジカン デザインスクール』

ゴミ、捨てんなよ!

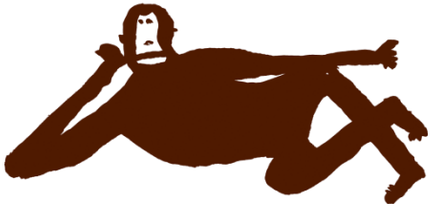


(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.


カネヤマ ノジカン
デザイン スクール

「ネオ山古志村」に広がる「デジタル村民」！

ゴミ、捨てんなよ！



(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

「ネオ山古志村」に広がる「デジタル村民」!

2004年の新潟県中越地震の発災から20年が経とうする中、新潟県長岡市山古志地域でユニークなコミュニティが活発化してきています。バーチャルとリアルが融合する「ネオ山古志村」です!

photographs by Hiroshi Takaoka　text by Kentaro Matsui

「Nishikigoi NFT」を購入し、山古志地域との関わりを始める。

ローカルとの関わり方はさまざまだが、新潟県長岡市山古志地域にははかにはないユニークな関わり方が用意されている。「Nishikigoi NFT」だ。NFTは世界で一つであることを証明できるデジタルデータで、音楽や動画、デジタルアートなど幅広い分野で発行や取引が行われている。そのNFTを地域づくりに活用しようと、『山古志住民会議』が山古志地域の特産である錦鯉をモチーフにしたNFTアートを創作。購入すると同時に山古志地域の「デジタル村民」になれる仕組みをつくった。これまでに1600人以上が購入し、山古志地域の課題や魅力を話し合うディスコード上のミーティングに参加し、アイデアを出し合っている。

「デジタル村民」の中には山古志地域を訪れ、独自の文化や住民との触れ合いを楽しむ人もいる。山古志地域の住民と「ネオ山古志村」というコミュニティをつくり、交流も深めている。この日は雪かきを体験しようと、6人の「デジタル村民」が「帰省」した。

新潟県長岡市山古志地域。「デジタル村民」が「帰省」してきました。

上／雪に覆われた山古志地域。春になると雪が解け、美しい棚田が表れる。右／「過疎地域持続的発展優良事例表彰」として総務大臣賞を受賞した「ネオ山古志村」。

『山古志住民会議』代表・
竹内春華さん

「ネオ山古志村」を運営する『山古志住民会議』代表の竹内春華さんと、「越後雪かき道場」に参加した「デジタル村民」。

山古志地域を元気に！それぞれの「帰省」の形。

「デジタル村民」は、山古志地域を訪れることを「帰省」と呼ぶ。ある「デジタル村民」がディスコードやSNSで、「デジタル村民になったので、山古志に帰省します！」と発信したことを機に「帰省」と呼ぶようになったと、「山古志住民会議」代表の竹内春華さんが教えてくれた。山古志地域を自分たちの「第二の故郷」と慕う気持ちの表れだろう。

「帰省」して何をするかは「デジタル村民」次第だ。神奈川県在住の会社員・るいさんは、1年余りで4回も家族と一緒に、「帰省」している。「帰省したらまず『やまこし復興交流館おらたる』を訪れ、竹内さんと挨拶を交わして、地域を散策します。牛の角突きを見たり、鯉の養殖場を見学したり。農家民宿にも泊まりましたが、ご飯がとてもおいしかったです。何度か訪れるうちに実家の母も『デジタル村民』になりました」と笑顔で話す。

静岡県在住の会社員・まゆぞうさんと、神奈川県在住の会社員・まめこさんは2人で「帰省」した。「秋の終わりでした。道沿いで催されていた錦鯉の販売会を眺めていると、錦鯉にもいろいろな種類があることをおじいさんに教わったり、直売所で棚田の新米を買ったり。一度『帰省』すると距離感が縮まり、また『帰省』したくなります」と話す。23年3月の「古志の火まつり」にも「帰省」して参加したそうだ。「集落ごとに小正月を祝う『さいの神』を、地域全体で行うのが『古志の火まつり』。稲藁や茅で高さ25メートルの『さいの神』を組み、燃やすのですが、ものすごい迫力でした。でも、35年続けられてきたお祭りが去年で最後に。資金と人材が足りなくなったのが理由だそうです」と残念そうに話した。

そんな山古志地域の暮らしや文化が存続するためのアクションプランを「デジタル村民」がプレゼンテーションし、人気投票で選び、「Nishikigoi NFT」の売り上げから与えられる予算を使って実施するというプロジェクトが行われた。1位の「仮想山古志村プロジェクト」は山古志地域を再現したメタバース空間をつくり、たとえば、中越地震の追悼式の会場をバーチャル空間にも設け、リアルとバーチャルの追悼式をハイブリッドで開催したり、小正月の「さいの神」をつくって、リアルとバーチャルの両方で燃やすイベントを行ったりしている。「メタバース空間をつくるには、リアルの山古志地域を訪れ、風景をスキャニングする必要があるので、制作スタッフは何度も『帰省』していました」と竹内さんは話す。

そうしたDAO（分散型自律組織）につながる取り組みもあり、2023年末までにのべ約350人の「デジタル村民」が「帰省」し、山古志地域の現在を知り、住民と交流を深めている。

『やまこし復興交流館おらたる』のインフォメーションと交流スペースカフェ。「おらたる」は「私たちの場所」という意味の方言。

ykxotkx's works Carp and Seasons

raf's works Generative patterns "NISHIKIGOI"

Okazz's works Colored Carp

❶『おらたる』に設置された水槽の中を泳ぐ錦鯉。山古志地域は錦鯉の産地として世界的に知られている。❷❸❹「Nishikigoi NFT」として販売されているNFTアート。同じデザインは二つとなく、購入することで「デジタル村民」になれる。

新潟県中越地震から20年。NFT、DAOを取り入れ、共同体の仲間を増やしていく。

難、
は「やまこし再生」に向けた
ぬまりだった

長島忠美

❺『おらたる』の震災メモリアル施設で中越地震の被害を説明する竹内さんは、2007年から『山古志災害ボランティアセンター』の職員も務めている。❻「古志の火まつり」。❼「帰省」の一コマ。夏の山古志地域は冬とは違う顔を見せる。❽メタバース空間でのミーティング。❾山古志地域の風物詩、牛の角突き。❿『おらたる』での「帰省」の様子。⓫発災から復旧までの記録をプロジェクションマッピングで紹介する「地形模型シアター」。⓬「地形模型シアター」の説明をする竹内さん。⓭東京で開催された「ネオ山古志村」の新年会。⓮長岡市山古志支所地域振興・市民生活課課長の五十嵐豊さん（中）と係長の今井雅廣さん（右）。⓯「ネオ山古志村」新年会での餅つき。

雪かきで山古志地域を知り、人に会い、一年の暮らしに思いを寄せる。

上／『山古志の宿 あまやちの湯』の駐車場の雪をかく「デジタル村民」たち。一列に並び、雪かき用スコップをたまった雪の面の上、右横、左横の3辺に突き刺して、最後に下の辺に刺してブロック状に雪を切り出し、勢いをつけて遠くへ投げ捨てる。下／雪かきの後は、かまくらをつくって遊んだ。

竹内さんを介さずに、地域住民とつながっていく。

この日の雪かきは、「帰省」した6人の「デジタル村民」とボランティアで行われた。指南役は、『越後雪かき道場』代表の上村靖司さんだ。1時間ほどの座学で雪かきの必要性や雪かきを行うときの注意点をレクチャーした後、『山古志の宿 あまやちの湯』の駐車場の雪かきをした。

参加者の一人に神奈川県から来たRYUさんがいる。RYUさんは牛の角突きにはまり、1年に10回以上も「帰省」している。竹内さんは、「私は『デジタル村民』と山古志地域の住民をつなぐブリッジ役を務めていましたが、RYUさんをはじめ何名かの『デジタル村民』は私を介さず、『いつ行きますから！』と住民と直接連絡を取って行き来しています」とうれしそうに話す。住民も『デジタル村民』に信頼を置き、意見を求めたり、課題を相談したりするようになってきているそうだ。

「『デジタル村民』は、山古志地域にあるさまざまな団体とつながる中で、住民の生の声を聞き、自分ができる範囲で経験や知恵を生かして活動してほしいです」と竹内さんは話す。

今後は、長野県・天竜峡や宮崎県・椎葉村との連携も進めていく「ネオ山古志村」。リアルな移住はすぐにできなくても、「帰省」したり、バーチャルで応援したりすることで、地域を盛り上げていく。

❶30分ほどかけて掘ったかまくらに入って、快適！ ❷かまくらの前で写真を撮り合う参加者たち。❸竹内さんも雪をかき出す。❹アルミ製やプラスチック製のスコップと、雪を一気に運び出すスノーダンプ。場所や状況によって使い分ける。❺座学の後、室内で準備体操をしてから屋外へ。体を温め、ヒートショックで心臓に負担がかかることを防ぐ。❻『越後雪かき道場』代表の上村さんによる、ユーモアを交えた座学。

「デジタル村民」のみなさんにとって山古志地域とは？

marinasさん

雪が降らない地域に育ったので雪かき体験、楽しかったです。山古志地域との関わりが深まるにつれて、愛着が湧いたり、何かやってみたいというモチベーションが高まったりしそうです。

RYUさん

牛の角突きが大好きで、1年間で11回、「帰省」しました。「デジタル村民」と山古志地域の方々が互いに関心を持つことで、距離を縮められたら。今度、「大人の運動会」をやりたいです。

merichan_senseiさん

東京から新幹線とレンタカーで2時間ほどの、意外と近くにある日本らしい田舎です。地域の方々は温かく、食べ物もおいしい、まさに「第二の故郷」として「帰省」しています。

るいさん

「帰省」すると時間の流れがゆっくりになります。頭の中を切り替えたり、仕事や生活のアイデアを出したり。季節に即した暮らし方を実感でき、都会に戻っても元気に過ごせます。

『山古志住民会議』・竹内春華さんの、移住にまつわる学びのコンテンツ。

Book	Book	Movie
写真集 山古志村	**ウェルビーイングのつくりかた**	**掘るまいか**
須藤 功著、農山漁村文化協会刊	渡邊淳司著、ドミニク・チェン著、ビー・エヌ・エヌ刊	2003年日本、橋本信一監督
民俗学者・宮本常一とともに山古志村の調査と撮影に携わった著者及び出版社が、山古志地域に寄贈した「復興支援本」。多様な人を惹きつけながら地域をつないできたことや、日本の地域が持つ価値観や文化は財産であることを教えられます。	地域の風景をつくり、その中で生きていることで、次第に「わたしたち」という感覚を持つようになりました。自分らしく生き、暮らし、多様な価値観を認め合う中で、拡張していく「わたし」と「わたしたち」という感覚を言語化した書籍です。	「山古志で暮らし続けるためには道が必要」と、村民が日本一の手掘りトンネル「中山隧道」を完成させる足跡を追った映画。自分や家族や仲間がより豊かな暮らしを送るためにアクションする住民の姿に、暮らすことは生きることと学びました。

リジェネラティブとは

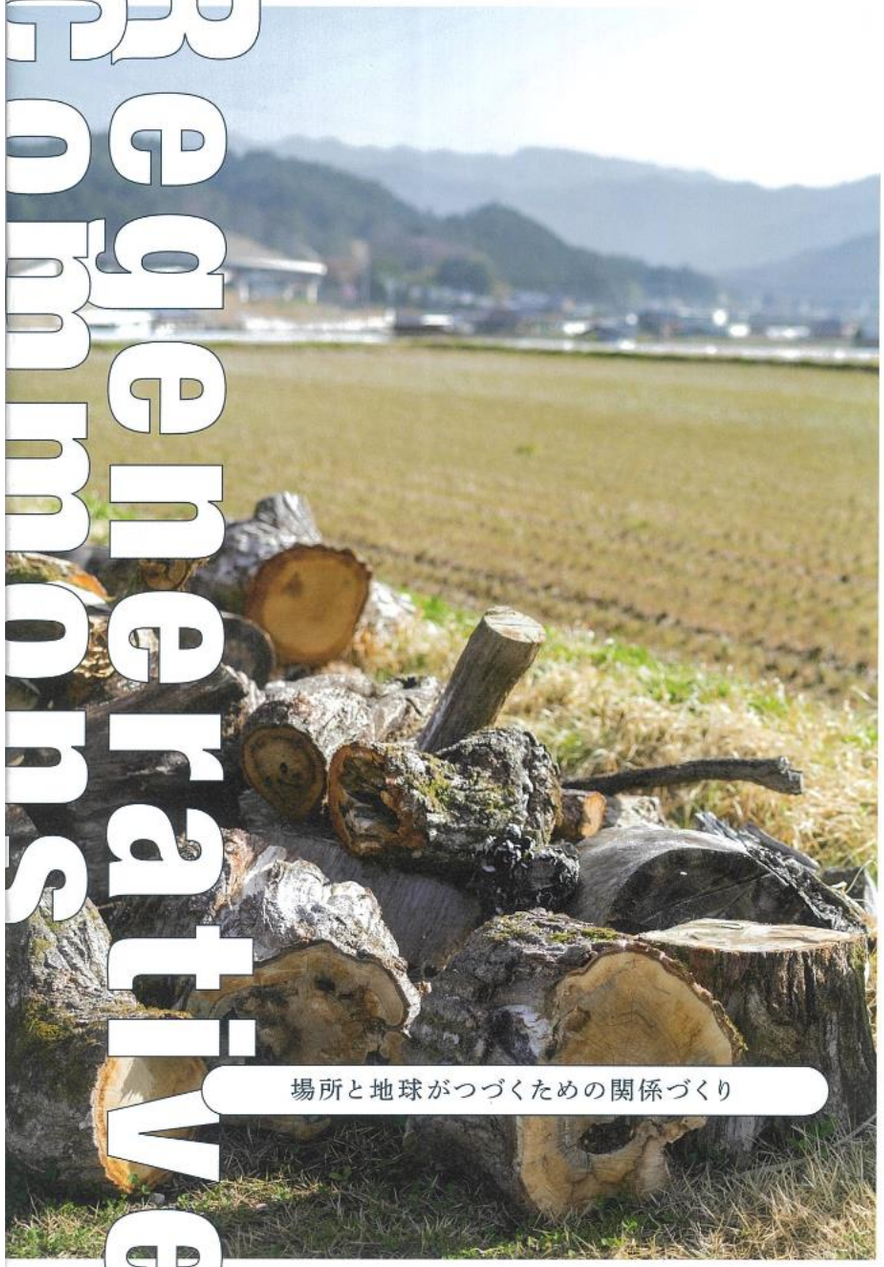
(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

リジェネラティブ（Regenerative）「再生させる」 の意味。「土壌を修復し、自然環境を回復する」という環境再生型農業をルーツに社会やまちづくりの分野でも広く使われる。

サスティナブルは「防ぎ、持続させること」、リジェネラティブは「防ぎ、再生させること」。リジェネラティブは、従来の場所や仕組みを改善し、人がより幸福になるよう取り組んでいく行為。

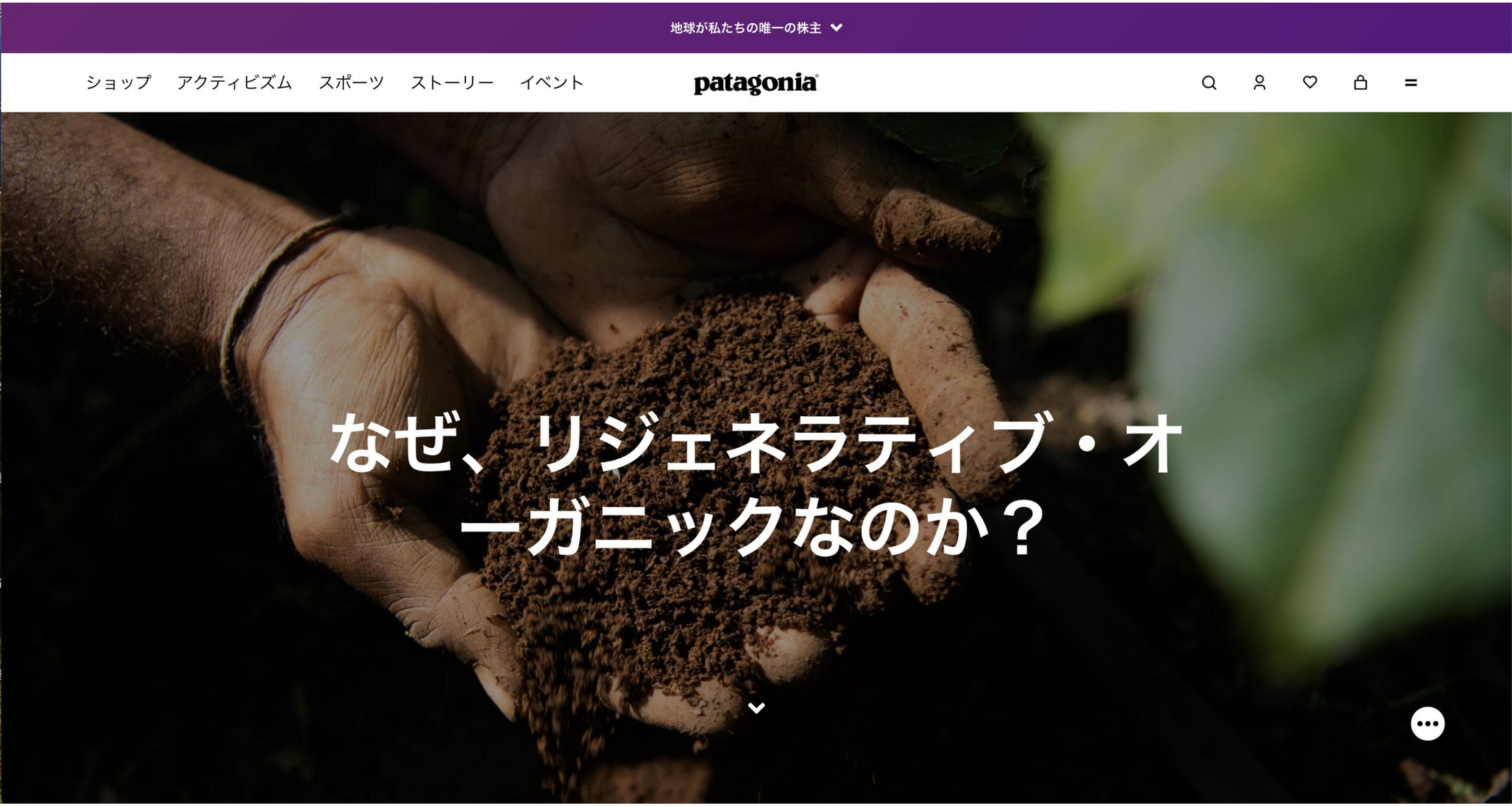
Regeneration
リジェネレーション
[再生]
気候危機を
Ending the Climate Crisis in One Generation
今の世代で
終わらせる
ポール・ホーケン 編著
Paul Hawken
江守正多 監訳 五頭美知 訳
山と溪谷社

Regenerative Commons



場所と地球がつづくための関係づくり

編著：中島弘貴・城山英明・東京大学連携研究機構不動産イノベーション研究センター（CREI）


地球が私たちの唯一の株主
ショップ
アクティビズム
スポーツ
ストーリー
イベント
patagonia
なぜ、リジェネラティブ・オーガニックなのか？

大阪・関西万博 日本館×ソトコト

万博未来編集部
ローカルツアー

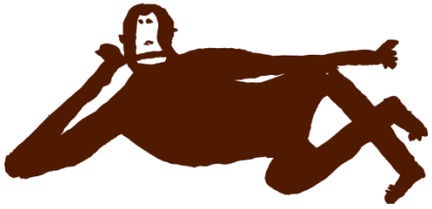
EXPO FUTURE
EDITORIAL DEPARTMENT
LOCAL TOUR

ONLINE

【京都支部Bチーム】実現したい未来のまちのテーマ：
廻る～ひらく、つどう、つぐ、いかす～

「田んぼで金魚」の楽しい毎日

ゴミ、捨てんなよ!



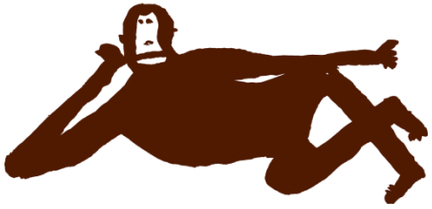
(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

KIRARA

頑張れ特華
特華の絆

三重県・大台町の
「ワンコの森あそび」

ゴミ、捨てんなよ!



(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

トヨタ
三重宮川山林

ワンコの森あそび体験会

in トヨタ三重宮川山林

開催日

日帰りプラン

11月10日(土)
11月11日(日)

2日間プラン

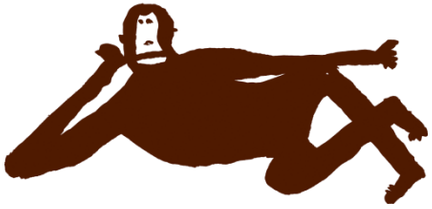
11月 17日(土)～18日(日)
11月 24日(土)～25日(日)

what's

JULIUS-K9

濱田祐太さんが描く、
地域に根ざすローカルベンチャー

ゴミ、捨てんなよ!



(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

濱田祐太さんが描く、地域に根ざすローカルベンチャー。

学生時代に『ローカルフラッグ』というまちづくり会社を立ち上げ、
20代の仲間と一緒に、地元の丹後地域を元気にする事業を展開中の濱田祐太さん。
どんな事業を、どんなふうに発展させているのか、伺いました!

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

京都府・与謝野町。「持続可能な地域づくりを」をテーマに挑戦中です!

『ローカルフラッグ』代表・濱田祐太さん。クラフトビール醸造に用いる牡蠣殻を収穫する阿蘇海をバックに。

江戸時代の学者・貝原益軒が現在の与謝野町の阿蘇海を訪れ、「あそびの海」と呼んだことにちなんで、ビールは「ASOBI」とネーミング。

与謝野町ならではのクラフトビールが誕生!

「ASOBI」という名前のクラフトビールが誕生したのは2020年秋のこと。つくったのは京都府・与謝野町の『ローカルフラッグ』。代表は濱田祐太さん、25歳。学生時代に故郷・与謝野町を中心とした丹後地域(与謝野町、京丹後市、宮津市、伊根町)の"旗振り役"になりたいと立ち上げたまちづくり会社で、ビールは「かけはしブルーイング」というブルワリーから売り出している。「2015年にビールジャーナリストの藤原ヒロユキさんが与謝野町でホップ栽培を始めました。『京都与謝野ホップ生産者組合』も組織され、年間約2トン栽培されています。新しい与謝野町の魅力をまちづくりに活用したくて挑戦しました」と、濱田さんはクラフトビールづくりに取り組む背景を語る。

一方で、丹後の有名な景勝地・天橋立がある阿蘇海は内海のため富栄養化し、牡蠣が大量発生。死んだ牡蠣の殻が海岸を覆うという環境問題があることも知った。そこで、大量の牡蠣殻を活用できないか調べたところ、ビールの醸造に使う水の硬度を上げ、ビールの本場のイギリスのような硬水に変えられることがわかった。こうして、まちの魅力と課題に紐付いた、与謝野町ならではのクラフトビールが生まれたのだ。

上/丹後ちりめんの産地としても知られる与謝野町。「ちりめん街道」をはじめ、古い町並みが残る。下/「大内峠一字観公園」から眺める阿蘇海と、左右に細く連なる天橋立。

❶イノベーションハブ『ATARIYA』で打ち合わせをする『ローカルフラッグ』のメンバー。左から、代表の濱田さん、与謝野町生まれの野村さん、川崎市から移住した高橋さん、京丹後市生まれの梅田さん。みんな20代だ。❷食や文化、工芸など丹後の魅力を展示するショーケース。❸2階にはイベントが行える40畳のスタジオも。❹元・料亭をリノベーションした『ATARIYA』。

地域の"旗振り役"として、好循環を生み出していきたい。

地域事業とビール事業。2本の柱で会社を運営。

『ローカルフラッグ』のメンバーは濱田さんを含めて四人だ。主に地域プロデュース事業とクラフトビール事業を軸に運営している。

地域プロデュース事業では、丹後地域にある企業の新入社員採用のためのサポートを行っている。企業と一緒に採用戦略を考え、インターンシップの企画・運営を実施している。また丹後地域出身の学生がUターンしたい、あるいはほかの地域の学生がIターンしたいと考えるとき、地域を案内したり、地域のキーパーソンを紹介したりして、学生と丹後地域をつなぐ事業も実施している。担当する梅田優希さんは、「ローカルビジネスにチャレンジするときに大事なのは、飛び込む勇気。やりがいを感じる仕事も多く、稼ぐチャンスもあります。U・Iターンを考えている若い人たちが『帰ってきたい』と思える仕事をつくったり、見つけたりして、その受け皿になりたいです」と話す。

濱田さんの必携アイテムはノートパソコンと、プレゼンテーション用のコネクター。

神奈川県川崎市から宮津市に移住した高橋友樹さんは、「丹後同期会」という丹後地域で就職した新入社員の同期が、横のつながりをつくるための研修プログラムを実施している。また「まちのコイン」という、まちと住民、住民と住民の関係を生むためのプロジェクトも担当。「顔が見える関係性のなかで仕事ができ、楽しいです」と、ローカルビジネスの魅力を語る。

もう一つの事業、クラフトビール事業の責任者は野村京平さんだ。「地元産のホップを使い、海岸の牡蠣殻を活用して、与謝野町ならではのクラフトビールをつくることで、まちの課題解決や地域の活性化につながればという思いはもちろんあります。ただ、ビール事業はまちづくりのためだけに行っているわけではなく、ものづくりを究める思いでビールづくりに取り組んでいます。その結果として、まちに人が集い、まちが元気になればうれしいです」と、ビールづくりに向き合う姿勢を熱く語った。

❻都市部から訪れた「与謝野ホップレンジャー」がホップの収穫を体験。「与謝野ホップレンジャー」は与謝野町のホップ栽培を手伝う取り組みで、現在も募集中。❼『ローカルフラッグ』のメンバーと、ビールづくりに詳しい外部委託の山根大樹さん。❽採れたてのホップ。ホップはビールの苦みや香り、泡持ちに影響を与える。❾ホップの収穫イベントも開催。❿カゴに集められるホップ。⓫山根さんが香りやサイズを確認しながらホップを収穫。⓬阿蘇海の天橋立の海岸で牡蠣殻を回収する濱田さん。⓭内海である阿蘇海には牡蠣殻が集積し、環境の悪化を招く。⓮「ASOBI」は、爽やかな柑橘の香りと麦のコクが味わえるペールエール。のどごしはスッキリ。⓯毎夏行われるホップ収穫体験。参加者と記念撮影。⓰出来立てのビールの香りと色をチェックする濱田さん。

丹後地域の豊かな自然を大切に、新しいビジネスを。

与謝野駅駅前のクラフトビール醸造所の建設予定地に立つ四人。念願の醸造所とパブがもうすぐ誕生する。

❶起業前に与謝野町の若者とワークショップを開催し、地域の課題や可能性を洗い出した。❷ワークショップで地域への想いを語る濱田さん。❸これから事業を始める丹後地域の若者が、地元の方に事業プランを相談。❹京都北部エリアでチャレンジする若者のコミュニティをつくろうと、地元の経営者仲間と濱田さんが始めた「海の京都ローカルベンチャースクール」。参加者は自分の事業プランをつくり、実践する。❺地元企業に就職した同期の若者たちが金融機関と一緒に研修を行う「但馬同期会」。❻京都府とともに学生のチャレンジを支援するプログラム「ローカルベンチャーカレッジ」の発表会。❼濱田さんは、『面白法人カヤック』の「地方起業の面白塾」のコーディネーターも務めている。❽新入社員研修での研修風景。❾「ローカルベンチャーカレッジ」の仲間と記念撮影。

ここから始まる！地域と僕たちの未来。

濱田さんは学生時代、「まちづくりには条例や制度が必要。政治家になろう」と考え、市議会議員の事務所でインターンシップを始めたが、そこで社会起業家に会う機会も多く、「事業を通じて社会課題の解決に取り組む姿がかっこよく見えました。こんな地域の変え方があるんだと気づかされ、僕も起業家を目指しました」。

1年間休学し、全国20ほどの地域へ視察に訪れ、ローカルベンチャーの起業家や地域のキーパーソンに会い、まちづくりを学んだ。そして2019年、4年生のときに『ローカルフラッグ』を立ち上げた。「起業する前に、丹後地域の企業と大学生をマッチングする学生インターンも企画していました。交通費程度の収入を得ていましたから、月に2、3回は与謝野町へ帰れました。企業や役場の方、地域のキーパーソンとのつながりが生まれ、起業後にやりたいことも見つかりました」と濱田さん。その経験があったからこそスムーズに起業できたそうだ。

今、『ローカルフラッグ』を立ち上げて4年目になる。事業を行うなかで、まちのさまざまな課題が見えてきた濱田さん。「移住者を増やすには、住んでもらう家が必要です。空き家は増えているのですが、活用が進んでいません。リノベーションして貸し出すなど賃貸事業も行いたいです。子どもの教育事業も充実させる必要があるでしょう。教育リテラシーの高い親御さんは移住の要件に教育を挙げる方が多いですから。また若い人たちの人材育成も重要ですが、後継者がいない企業の事業承継も弊社でサポートしていけたら」と将来的な事業展開も見据える。

そうしたまちの課題を解決していくには、まずは『ローカルフラッグ』が会社としての基盤をつくることが第一だと濱田さんは言う。「そのためにも、クラフトビール事業に力を入れているのです」と、四人である場所へ向かった。

そこは、京都丹後鉄道与謝野駅の駅前にある更地だった。「ここにクラフトビールの醸造所とパブをつくります」と濱田さんたちは購入した更地に立った。土地を買い、醸造所をつくることは、地域に根ざす強い覚悟を示すものでもある。今、「ASOBI」は静岡県の醸造所にレシピを伝えてつくってもらっているが、醸造所が完成すれば、製造から販売まですべてを自分たちで担うことになる。当然、リスクも負うだろう。「でも、まちの方々からの応援を感じているので心強いです」と濱田さん。野村さんも、「イギリスでビールを飲める場所を尋ねると、『グッドビアか？　グッドパブか？』と聞き返されます。僕らはここに、地域内外の大勢の人が集い、『ASOBI』を飲み、地元のおいしい料理を食べ、楽しく交流できる『グッドパブ』をつくりたいです」と意気込んだ。

この醸造所建設のプロジェクトは、与謝野町のふるさと納税を通じて応援できるガバメントクラウドファンディングにも登録している。「応援をお願いします！」と、四人は『ソトコト』読者に呼びかけた。夢は始まったばかりだ。

「丹後地域の企業を巻き込みながら、地域課題を解決する事業に挑戦していきたいです」と語る濱田さん。

「まちに1つしかない駅は、与謝野町の玄関口。遠くからも来ていただきたくて、ここに決めました」と濱田さん。

『ローカルフラッグ』・濱田祐太さんが今、気になるコンテンツ。

Newspaper

北近畿経済新聞

https://kitakinkikeizai.jp

与謝野町を含めた北近畿エリアのニュースが満載です。僕は紙版を購読しています。新しい出来事や企業の挑戦などの情報が入手でき、事業にも役立ちます。紹介された企業や人に連絡を取り、つながりが生まれたりも。

Online Salon

地域資本主義サロン

https://smout.jp/event/online-salon

「面白法人カヤック」のオンラインサロン。月1回の講座では、CEOの柳澤大輔さんとまちづくりの達人の対談が行われ、成功や失敗の事例が語られます。参加者のディスカッションもあり、実践のアイデアが得られます。

Book

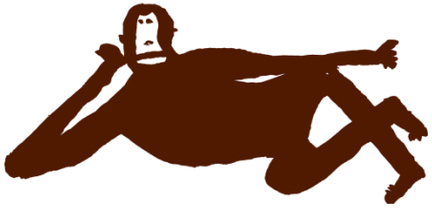
ローカルベンチャー―地域にはビジネスの可能性があふれている

牧 大介著、木楽舎刊

起業前に牧さんが活躍される岡山県・西粟倉村も訪れました。この本は地域でチャレンジする若い人たちに勇気を与えてくれます。背中を押されるし、悩んだときに読み、解決の糸口を探っています。

荻野隼一さんが表現する
農業×ファッションの力!

ゴミ、捨てんなよ!



(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

草刈機を手に、スケートボードに乗る荻野さん。農作業に向かう、いつもの風景。

荻野隼一さんが表現する農業×ファッションの力！

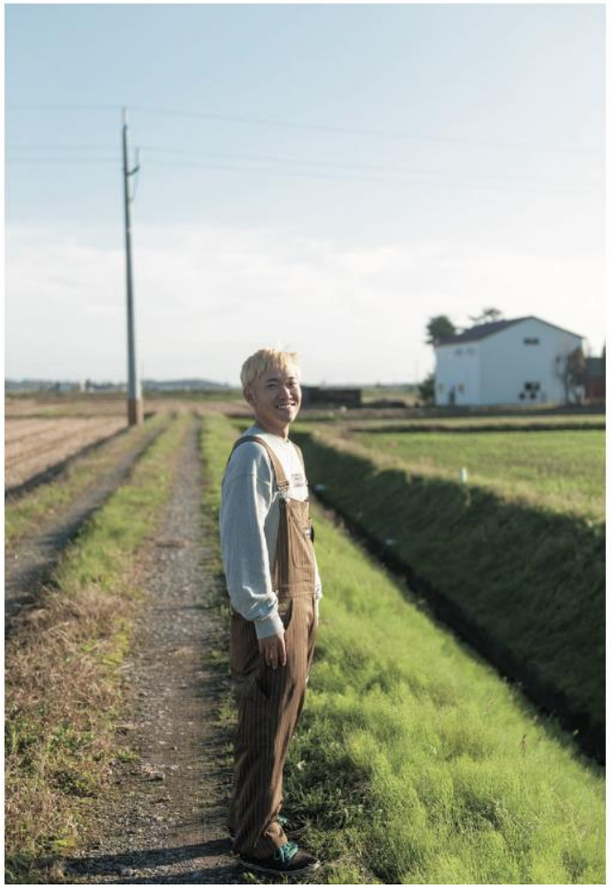
荻野準一さんの拠点は、北海道の玄関口・新千歳空港からクルマで約40分のところに位置する夕張郡栗山町。農業のかたわら、ファッションブランド『ogiiinuts（をぎーなっつ）』をはじめ、仲間たちとさまざまな取り組みを行う荻野さんが見据える、農業や地域の未来などについてお聞きします。

photographs & text by Yuki Inui

金髪、ピアス、個性豊かなファッション。荻野さんの風貌は印象的だ。肩書は「農家アーティスト」。そして「農家」なのだが、現在の荻野さんの活動は実に多彩。その一端を、まずは少し紹介する。

今回、取材の待ち合わせ場所に向かってみると、そこでは札幌市にあるウェブ制作会社がワーケーションを行っていた。栗山町を見渡せるロケーション。町で活動する地域おこし協力隊隊員が発案したプロジェクトで、荻野さんも後押しする。この日、荻野さんは所有するテントサウナの貸し出しを行ったそうで、今後はさらに関わりを深めていきたいと話す。「こんな立地でワーケーションとか最高ですよね。そこに自分が好きなサウナを持ち込んだだけ。『自分たちが楽しんでいたら、みんなも栗山町を楽しんでくれるはず！』という発想で、今後もやっていきたい」。栗山町に「人を呼び込む」ことについて、荻野さんにはビジョンがある。「周辺にある市町村と団体をつくろうという話を進めています。点ではなく面で推していけたら、このエリアの価値がもっと伝わるはず。ゆくゆくは移住定住につながったらいいなって」。栗山町にある空き家や空き店舗の活用にも意欲的で、荻野さん自身、一軒の空き家を購入。この秋からリノベーションに取り掛かり、活動拠点兼交流の場となるようなスペースを目指すという。

上／撮影時、荻野さんが耳につけていた、おしゃれなピアス。左・右下／「ogiiinuts」で手がけたロゴやワッペンなど。荻野さんのパートナーである湯浅那月さんがデザインした。左下／荻野さんが働く『荻野農場』近くで撮影。周囲には広大な畑や水田が広がっていた。



❶❷ワーケーションのプロジェクトが行われた『菅野牧園』にて。東日本大震災で被災した和牛農家・菅野義樹さんが運営する牧場で、栗山町が一望できる風光明媚なロケーションにある。❸荻野さんと話しているのは栗山町の地域おこし協力隊隊員・長広大さん。❹『菅野牧園』にあるカフェで、今回のワーケーションの感想を述べ合う参加者たち。❺『荻野農場』の倉庫に積み上げられていた、農家向けの作物・種芋。❻❼荻野さんは試験的に無農薬で野菜を育てる。「いずれは消費者向けの野菜、それも環境に配慮した農法で育てた野菜の割合を増やし、直接販売したい」。

『ogiiinuts』立ち上げの背景にあったのは「食への危機感」。

生粋の農家の担い手が、ファッションブランド!?

幼いころから父親とともに働くことが夢だった荻野さん。実家は4代続く『荻野農場』。米や麦、大豆、イモなどを栽培する大規模農家だ。荻野さんは中学校卒業後、地元の『岩見沢農業高校』に進学。さらに専門的な知識を学ぶために『北海道立農業大学校』へ。稲作関係のカリキュラムは、提携している『拓殖大学北海道短期大学』で集中的に学び、2年間で2つの学校を卒業し、『荻野農場』で働くこととなった。それは2015年、荻野さんがまだ20歳のころ。

農業分野での荻野さんの活動は全国に広がる。先輩らからの推薦もあり、若手農業者の全国的な組織である『日本4Hクラブ』や、『北海道アグリネットワーク』の役員や理事などを歴任。組織運営に関わったり、農林水産省に行って意見交換をしたりなど、さまざまな経験をしたという。

農業を軸に活動していた荻野さんが、突如ファッションブランドを立ち上げたのは2019年。その背景にあったのは「食への危機感」だった。「みんな毎日ご飯を食べているのに、意外と『食』に興味のない人が多いように感じたんです。当たり前のように、目の前に出されたものを食べる。でも、食って人間にとって一番大事なこ

❶シルクスクリーンでTシャツにプリントする荻野さん。❷パートナーの湯浅さんとプリント作業。『ogiiinuts』の独特のデザインはすべて湯浅さんが担当した。❸❹❺荻野さんの活動拠点の設計を担う『空間工作所』の神谷幸治さんと、施工後の模型を見ながら打ち合わせをする荻野さん。❻❼地域の卓球教室や中学校の部活動などを指導する荻野さん。高校時代に全道大会に毎回出場するなど、活躍した経験を評価され、抜擢された。

地域、そして世界が少しでもいい方向に向かうために。

❶荻野さんと湯浅さん。陽気な二人の雰囲気がこのポーズと笑顔からもわかる。❷❸❹湯浅さんが手がけたオリジナルデザインのロゴなどが入ったバーカや帽子、シャツなど。湯浅さんはデザインスキルを独学で習得。「本をひたすら読んで、そこから想像力を膨らませて。自分にしかできないデザインをつくりたかったから、誰からも教わりませんでした」。

とだと思うんです。その食べ物に何が入っているのか、農家さんがどういう想いで育てているのかなど、食や、そのベースにある農業に目を向けてほしいと思ったのが最初です。でも、そんなこと、まじめに話しても伝わらない。自分がおもしろそうなことをして目立つようになれば、『をぎじゅん（荻野さんの愛称）がつくった野菜だから食べてみよう！』とか、さらには『農業ってなんかかっこいいらしい、ぞ』とかってなるんじゃないかなって」。

そして『ogiiinuts』立ち上げには、栗山町の地域おこし協力隊の一員として、町の農業振興に携わった湯浅那月さんとの出会いが大きかった。湯浅さんも管理栄養士の資格を大学で取得するなど、もともと食への関心が高かった。一方で、"食の根っこ"のような農業にもおもしろさを感じていたという。「大学を卒業してすぐに地域おこし協力隊隊員になりました。自然も好きだったので、農業に関わる仕事は合っていたし、やりがいもあったのですが、活動するうちに『農業をもっと魅せたい』という気持ちが強くなって」。

もともとファッションに興味のあった二人。ファッションブランドの立ち上げは自然ななりゆきだった。デザインには野菜や農業のモチーフを積極的に取り入れた。Instagramで発信すると、瞬く間に人気となった。ちなみにブランド名は「荻野」と、湯浅さんの名前である「那月」を掛け合わせている。

環境へのメッセージを込めた『ogiiinuts』。

二人がつくる『ogiiinuts』はオーダーメイドのファッションブランドだ。環境に配慮した生地を仕入れ、そこにオリジナルデザインのロゴなどを、お客さんのオーダーに合わせてシルクスクリーンでプリントし、基本"手渡し"するというスタイル。「新作のロゴデザインなどをInstagramで発表し、締め切りを設定して注文を受け付けます。でも、すぐには買えません。ある程度、予約が集まったら生地の発注をかけ、生地が届いたタイミングで、お客さんに連絡をし、ロゴなどは相談しながら好きな位置、色で入れていきます」。売るのが難しそうな仕組みにも思えるが、荻野さんのメッセージはそこにある。これまでの多くのファッション産業に見られた大量廃棄や、高い環境負荷などの問題。「売ってはいるんですけど、あんまり買ってほしくないとも思っていて（笑）。注文を受けてから生地を発注し製作するのも、無駄がないですよね。もちろんリペアも受け付けています。持っている服を持参してもらい、『ogiiinuts』のロゴをプリントするワークショップも、今後は始める計画です。そのほうが買うより安くなるし愛着を持って着てもらえるかなって」。

❶荻野さんが会長を務める『栗山町４Hクラブ』では若手農業者が、新規就農者を応援するプロジェクトも始動。写真はこの日、参加したメンバー。❷『栗山町４Hクラブ』で手伝いに訪れた『ほりほりファーム』の堀純一郎さん。「僕は、荻野さんが栗山町はもちろん、北海道を担うスターになると確信しています！」。❸「栗山町４Hクラブ」で新規就農者を応援するプロジェクトのリーダーである川畑亮太さん。❹「若い世代や新規就農者のネットワークをどんどん広げていきたい」と荻野さん。

すべてへは栗山町のため、農業のために。

これから改装を始めるという、荻野さんの活動拠点も見学した。「ここはシェアハウスやゲストハウスのような、人が集まる家にしたいと思っています。オープンは２０２３年春ぐらい。テントサウナのイベントなども開けるよう、庭と一体となった空間を、設計士の方にお願いしています」。

活動は加速する。「廃校を活用した体験型宿泊施設『雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウス』と連携し、２０２３年６月あたりに音楽フェスも開催する予定です。つながりのあるアーティストを栗山町に呼んで、盛り上げたい」。主催者には著名なYouTuberも名を連ねているといい、荻野さんもその一人。「フェスを主催した農家って、『ただものじゃない！』ってなるじゃないですか。『どんな農家？』『おぎじゅんって誰？』ってなったら、栗山町に来てくれるきっかけになるんじゃないかって思っています」。

多方面に目を向け、精力的に活動する荻野さん。ただ、すべての活動は"２つのこと"に集約されると荻野さんは話してくれた。「全部、栗山町のためであり、農業のためと思ってやっています。僕らが活動することで、栗山町の名前が知られて、町を訪れたり、移住してくれる人が増えたらうれしいですし、農業でも、『栗山町産の野菜だから買う！』みたいになったら、これ以上のことはないですね。自分たちは楽しいことしかやらないし、楽しかったらうまいこと回っていくと思っています。小さい取り組みかもしれませんが、共感してくれる感覚の近い人と一緒に、地域や、そして世界がいい方向になればいいなと思って活動を続けていきたいです」。

「農家アーティスト」・荻野隼一さんが今、気になるメディア。

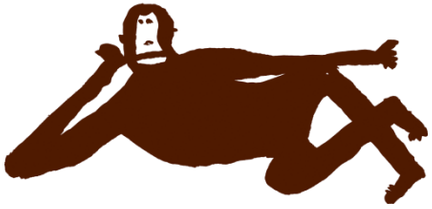
Instagram
あやお 創る人
@ayaotsukuru
海ゴミアーティスト・あやおは、「わったん」を介して知り合いました。アートを通じて、海の環境の大切さを発信している人で、めちゃくちゃ共感します。ブランディングや、ストーリーづくりなど、影響を受けている一人です。

Instagram
ライフコーチ わったん
@wattan_blog
「心とお尻に火を灯すライフコーチ」として活動する「わったん」のInstagramです。消防士を辞めて家族4人で沖縄県へ移住した人で、食への考え方だったり、モノの少なさだったり、生き方そのものを見習っています。

Instagram
ugo｜雨後
@ugo_lifestyle
DIYした空間がめちゃくかっこいい、札幌にある複合施設のInstagram。リアル店舗も、SNSでの発信もセンスよくて、参考にしています。実は活動拠点の一室のリノベーションもお願いしていて、完成が待ち遠しいです！

中川めぐみさんが取り組む、「釣り×地域活性化」の可能性

ゴミ、捨てんなよ!



(C)2009 SOTOKOTO. All rights reserved.

中川めぐみさんが取り組む、「釣り×地域活性化」の可能性。

釣った魚を地域通貨で買い取ってもらい、それでお土産を買ったり、地元の料理に舌鼓を打ったり。そんな、「ツッテ西伊豆」という静岡県・西伊豆町で体験できるユニークな取り組みをご紹介します!

photographs by Hiroshi Takaoka　text by Kentaro Matsui

「釣りアンバサダー」として、釣りの楽しさと地域の魅力を発信。

新規事業の案がきっかけで、釣りにハマった中川さん。

釣り船に乗って海釣りをするとなると、釣り未経験者にはハードルが高く感じられるが、「人丈夫。楽しいですよ!」と、「釣りアンバサダー」を名乗って「釣り×地域活性化」に取り組んでいる中川めぐみさんは笑顔で呼びかけてくれる。「大丈夫」と言うには根拠がある。中川さん本人がまったくの釣り未経験者だったからだ。

中川さんが釣りにハマったのは30歳のとき。当時、ゲーム事業が主体の東京のITベンチャー企業に勤めていたが、ゲーム以外の新規事業が社内で募集され、人気を博していた釣りゲームを生かして、リアルの釣りの予約サイトやECサイトを提案すると、部長プレゼンにまで進んだ。ところがその段階で、チーム全員が釣りの経験がないことに気づき、東京湾に釣りに行くことにした。「釣りはおじさんの趣味」と考えていた中川さんだが、「生まれて初めての釣りでした。竿などはレンタルでき、初心者にもていねいにレクチャーしてくださる釣り船でした。で、アジが10匹も釣れたんです! アジがかかった瞬間、竿を持つ手にピクピクッと振動が伝わってきて、狩猟本能が目覚めるみたいな衝撃的な感覚を覚えました」と、中川さんは興奮気味に話す。釣ったアジは家に持ち帰り、YouTubeを見ながら三枚に下ろし、刺し身やフライにしておいしく食べた。

その体験をSNSでシェアすると、「楽しそう!」「連れてって」という反応が、特に女友達から多く返ってきたそうだ。その後、中川さんは数年間勤めた会社員時代に男女100人ほどを「釣りデビュー」させることになるが、何よりも自分自身が釣りにハマった。

旅先でも釣りをしてみた。釣り船に乗ると、「どこから来たの?」と声をかけられ、釣った魚はその地域ならではの食べ方を教わった。釣りを終えると、「何月には何が釣れるから、またおいで」と言われ、笑顔で別れた。釣った魚を料理してくれる飲食店に持ち込むと、常連客が、「何が釣れたの?」と入れ物を覗いて会話が始まる。そんなコミュニケーションが新鮮だった。「釣りをすることで旅が変わるんだ」と中川さん。さらに、地域の現状に触れるなかで、「釣りは地域活性化にも貢献するかも」と考えるようになった。ITベンチャーから人材領域のIT会社に転職し、UIターン転職のサポートをする部署の広報を担当したことで地域で活動する人々とも接するようになり、「私も地域活性化のプレイヤーになりたい」と、35歳で退職。フリーランスとなり、1年間ほどは各地で釣り三昧の日々を過ごした。手ぶらで行って釣りが楽しめ、初心者でもレクチャーが受けられ、釣った魚を料理して食べさせてくれる飲食店がある地域を探して訪ね、体験し、記事に書き、自撮り棒で写真も撮り、自身で立ち上げたウェブサイト「ツッテ」に掲載するという作業を繰り返した。そんな"釣り愛"が結実した「ツッテ」で紹介する地域は、約110か所にも上る。

「「ツッテ」は、釣って食べる、釣って出会う、釣って自然に触れるというように、釣りの向こうに地域があると捉えたタイトル。釣りは、地域の魅力を味わう入り口の遊びなのです」と、釣りや地域に対する思いを語った。

右／切り立った断崖が連なる西伊豆の海岸線。きれいな景色に癒やされながら釣りができる。左／「ツッテ西伊豆」の釣りを楽しめる龍海丸。仁科漁港から出航!

中川めぐみさん

なかがわ・めぐみ●1982年富山県生まれ。釣りアンバサダー、「ツッテ」編集長、『ウオー』代表。ITベンチャー、広告代理店に勤めるなかで釣りに出合い、「釣り×地域活性化」の事業で独立。釣りや漁業を通して地域の魅力を発信している。

「ツッテ西伊豆」で、釣り人もローカルも、関わるみんなが幸せに！

この日は少し波があったが、酔止め薬を飲んでおけば大丈夫なレベル。「竿先ばかり見ず、ときどき遠くの風景を見ると酔いにくいですよ」と松浦さんが教えてくれた。

ひょんな出会いから、「ツッテ西伊豆」スタート！

釣りにハマって数年が経った頃、中川さんは静岡県・西伊豆町を紹介するメディアのモデルとして西伊豆町を訪れた。その取材をアテンドした役場の担当者が松浦城太郎さんだった。西伊豆に生まれ、子どもの頃から釣りが大好きで、今は週末に漁師もしている松浦さんは、「釣りは地域の入り口」という中川さんの考え方に共感。「お客さんが西伊豆での釣りを存分に楽しみながら、地域課題の解決につながるような取り組みができれば」と中川さんや関係者と話し合いを重ね、ユニークな仕組みをつくった。それが、「ツッテ西伊豆」だ。遊び方は、こうだ。

提携している釣り船に事前予約をする。初心者や子どもには釣具のレンタルと釣り方のレクチャーがついている「ファミリープラン」がおすすめだ。予約ができたら、釣りの当日、直接港に集合し、出航。魚のいそうなところへ船長が船を近づけてくれて、釣り方も教えてくれるので、初心者でも安心して魚釣りが楽しめる。釣った魚は漁港にある産地直売所「はんばた市場」で買い取ってもらえるので、船長の指示を聞いて血抜きや氷締めを行う。釣りが終わり、「はんばた市場」に魚を持ち込み、市場の担当者が買い取り価格を査定する。ワクワクする瞬間だ。査定額に納得したら、西伊豆町の電子地域通貨「サンセットコイン」と交換。スマートフォンにチャージされ、西伊豆町内の飲食店や宿、土産屋、温泉施設、釣り船、ガソリンスタンドなど約130店舗で使える。さらに、釣った魚は自分で食べることもできる。提携の飲食店に事前予約をし、指定の時間までに持ち込めば、昼食や晩ご飯に食べられるよう料理してくれる。

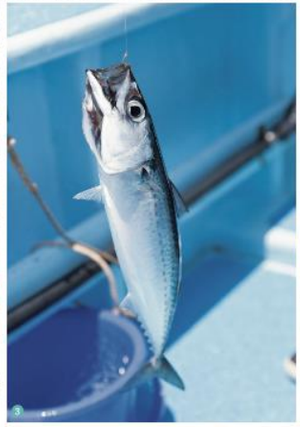
「『ツッテ西伊豆』を2020年9月に始めてからファミリーや女性など新しいお客さんが増えました」と中川さん。「お子さんは魚を釣って、地域通貨と交換して、自分でお金を得たのがうれしいのでしょう、『パパ、おごったげる』と父親にお土産を買ってあげたり。魚が食卓に上るまでの流れや、命を頂く大切さも学んでいます」。

「ツッテ西伊豆」は町の課題にもアプローチする。それは、漁業者不足。「西伊豆町は高齢化率約52パーセントと県内で最も高齢化が

❶「ツッテ西伊豆」の仕組みを町や遊漁船組合、飲食店と一緒に考えた中川さん。❷魚に触るときの手袋や豚に詰まった針をはずすペンチは自分で用意。❸自撮り棒も必携。釣りの様子を自ら撮影し、「ツッテ」にアップ。

海が豊かだからこそ、そして漁師がいるからこそ、おいしい魚が食べられる。スーパーの魚売り場からは見えないリアルな海が体感できる。

❶潮風を浴びながら釣りを楽しむ中川さん。船長が釣り客に「50メートルです！」と伝えると、その深さにイサキの群れが泳いでいる合図。教わったやり方で竿を操り、糸を垂らす。すると……。❷「丸々と肥ったイサキが釣れました！」と中川さん。❸海釣り初挑戦の筆者はサバを釣った。❹船長の息子の山田職哉さんは約1.5キロのアマダイを釣り上げた。さすが！　❺中川さんはレンコダイをダブルでゲット！　❻朝、西伊豆町の仁科漁港に集合。船長の山田雅志さんの案内で出航！　❼「ツッテ西伊豆」を主催する西伊豆町の職員・松浦城太郎さんは釣りの達人。血抜きや氷締めも教えてくれた。



❶富山県・朝日町で海女になるため、先輩漁師について潜りの練習を。❷日本財団主催の「海のごちそうフェスティバル」でトークショーに登場。❸朝日町の先輩漁師と食事会。海や魚、漁師について教えてもらった。❹富山市水橋町でホタルイカ漁に同行。❺千葉県館山市でカワハギ釣り。釣り人の特権と言える肝和えの刺し身を食べた。絶品！　❻愛知県常滑市でタコ釣り。持つのが怖くて船長に持ってもらって撮影。

自分で釣ったイサキをおいしく料理してもらって食べる幸せを噛みしめる中川さん。西伊豆の魚、海、そして人のファンになること間違いなし！

進むまち。第一次産業に限ると90パーセントを超えます。漁師が減り、漁獲量が減っています。「ツッテ西伊豆」のお客さんが釣った魚が販売されることで魚不足を補えるのはありがたいこと」と松浦さんは話す。観光を盛り上げつつ、漁業のまちとしての漁獲量を確保する取り組みとしても「ツッテ西伊豆」は役立っているのだ。

「西伊豆だけでなく、全国の漁業のまちも気にかけてほしいです」と、中川さんは言う。「漁法や資源管理、魚の品質にこだわった獲り方をする漁師さんたちを〝推し漁師〟と呼んで応援しています。多少値段が高くても買い支えになるし、どこの海で、どんな漁師さんが、どうやって獲った魚なのかを意識することで、ちゃんと料理して、おいしく食べたいという気持ちになります。食べることが何よりの応援です。皆さんも〝推し漁師〟を見つけてください！」。

中川さんは、故郷・富山県で副業、海女をスタートした。「漁業権を持つプレイヤーとして、深く海と関わりたいです」と目を輝かせる。その奮闘ぶりはnoteで発信する予定だとか。乞うご期待！

❶みんなで釣ったアマダイ、サバ、イサキ、レンコダイ、アジ（一部）を抱えてご満悦。❷魚種、サイズ、市場価値で価格が決まる。❸地域通貨アプリ「chiica（チーカ）」をダウンロードしたスマートフォンからQRコードを読み取り、サンセットコインを付与。❹『はんばた市場』で配布している「chiicaカード」も使える。❺買い取り価格は総額5918円！　❻魚の安全管理のため証明書を発行。❼魚を売ったお金で地域の産品をお土産に。❽仁科漁港の『はんばた市場』。下船したら新鮮なうちに魚を持ち込もう。❾事前に予約しておいた食事処『竹内』に持ち込んだイサキの刺し身、煮魚、焼き魚。計1940円。❿「いいイサキ釣ったね！」と店主の竹内政徳さん。

「釣りアンバサダー」・中川めぐみさんが選ぶ「海と食とSDGsに触れる本5冊」

最新版 図解 知識ゼロからの現代漁業入門

漢田武士監修、家の光協会刊

漁師さんと交流する機会が増えてきたときに、漁法や漁業の歴史など漁の基本的なことは知っておこうと思い、手に取った本です。海関係で仕事をしてみたい人、漁業に対しておもしろいアプローチをしてみたいという方におすすめします。

さらばあやしい探検隊 ―台湾ニウトリ島乱入

椎名 誠著、KADOKAWA刊

椎名さんの「あやしい探検隊」シリーズのなかの台湾編。仲間と一緒に船に乗ったり、無人島に出かけたり、マグロを釣ったり、おいしいものをたらふく食べたり。こんな遊びができたら楽しいだろうなと、学生時代から憧れて読んでいます。

マイノリティデザイン ―弱さを生かせる社会をつくろう

澤田智洋著、ライツ社刊

マイノリティの課題をキュートなアイデアで解決に導く著者の姿勢に共感。漁師さんも今やマイノリティかもしれません。真剣に向き合いつつも、難しく考えずに、楽しみながら課題解決につなげていければと考えさせられる一冊です。

ファンベースなひとたち ―ファンと共に歩んだ企業10の成功ストーリー

佐藤尚之著、津田匡保著、日経BP刊

ファンベースは多様な人たちが一緒に盛り上げる「共創」の発想が基本。私が提案している〝推し漁師〟も同じ。漁師さんが多様な人と交流し、ファンをつくることで、新しい発想やビジネスが生まれるはず。ファンのつくり方が書かれた本です。

里海資本論 ―日本社会は「共生の原理」で動く

井上恭介著、NHK「里海」取材班著、KADOKAWA刊

海ではいろんな連鎖が起こります。例えば、海藻は魚の棲み処として大切ですが、間引いたほうがいい。それをサウナに敷くと肌によく、古くなったら農家が引き取って肥料にする。そんな事例を読んでいるといろいろなアイデアが思い浮かびます。

地域に新たな風を吹き込む
リジェネラティブな視点

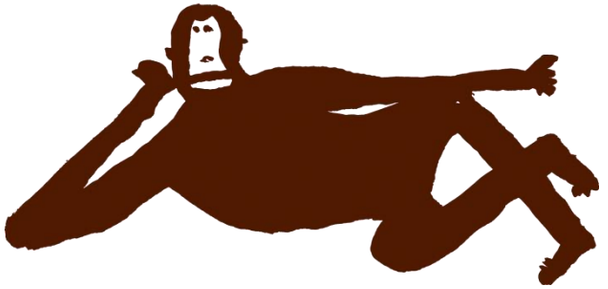
1. 関係案内所

2.未来をつくっている手応え

3.自分ごととして楽しい

4.仲間の存在を知る

ご清聴
ありがとうございました。
最新号は好評発売中！
特集「ニュー・移住スタイル」

ソーシャル＆エコ・マガジン
未来をつくる仲間が増えています!
ソトコト
ありがとう20周年!!
祝
20th
ゴミ、捨てんなよ!

ゴミ、捨てんなよ!